

母親が子どもを「これ」と呼ぶとき
— 母親による子どもに対する指示の会話分析のための小論 —

戸 江 哲 理

When Mothers Refer to Their Child as *Kore* (“This”):
An Essay from a Conversation Analytic Perspective

TOE Tetsuri

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 専任講師

連絡先：戸江哲理 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
toe@mail.kobe-c.ac.jp

Summary

Based on seminal works (Schegloff 1996; Schegloff and Sacks 1979), recent conversation analytic studies have shown that various forms of reference can perform a particular interactional work other than referring to (a) person(s) (e.g. Stivers 2007). Tanya Stivers (2007) observes that we should focus on the relationship between a referring expression and a turn construction unit containing the referring expression to examine the interactional work in question. In this article, I investigate the kind of interactional work a mother is doing when she uses *kore* (“this”) to refer to her child (who is still not old enough to speak as a socially competent person) in conversations. I examine conversational excerpts gathered from two *kosodate hiroba* (institutions where mothers with very young children visit to have conversations with each other and with staff members) in Osaka. My analysis shows that *kore* characterizes the child who is referred to as a thing, and this characterization “helps accomplish” (Stivers 2007:92) or strengthen the actions of the turn construction units containing *kore*. For instance, a mother represents her child as a heavy load by using *kore* to refer to him in order to stress how powerful her motorbike is. My findings show that a mother uses *kore* to refer to her child for practical purposes, and that its use is not related to her love (or lack of it) for her child.

Keywords: conversation analysis, person reference, *kore*

要 旨

私が子育てひろばで収録してきたビデオテープには、母親が自分の子ども（言語能力が十分ではない乳幼児）を「これ」と呼んでいるやりとりが若干ながら存在する。母親は何のためにこの指示表現を用いるのか。本稿の目的は、会話分析の手法を用いてこの問題を解明することにある。会話分析は人物指示についても研究の蓄積を進めてきた。近年では、人物指示が担っている指示とは別の相互行為的な役割に照準を合わせた研究も登場している。そこからは、この課題に取り組むに当たって、それ自身をふくむ発言が遂行している行為との関連で指示表現を捉えることの重要性が示唆される。本稿はこの示唆を踏まえた分析を行った。分析ではまず、「これ」が指示された子どもを物として特徴づけていることを確認した。そのうえで、「これ」をふくむ発言の遂行している行為を特定し、「これ」の物としての特徴づけとの関係を検討した。結果、「これ」がそれらの行為を補強していることが明らかになった。たとえば、母親は「これ」によって子どもを重い荷物として提示し、子どもを乗せていても長い橋を短時間で渡ることができるミニバイクの馬力の強さを強調していた。「これ」という指示表現だけを取り出すと、母親が子どもに対して愛情を抱いていないがゆえに、そう呼んでいるような印象を受ける。だが、この指示表現をその本来の出所であるやりとりにおいて捉えるなら、子どもへの愛情とはおよそ無関係なそこでの実際上の狙いのために、母親たちはそれを用いていることがわかる。本稿は、そのリアルな生活に即した母親と子どもの関係の把握を会話分析が可能にすることを例証している。

キーワード： 会話分析、人物指示、「これ」

1 子どもの呼びかたと母親の愛情

ゼミの面談に来た学生が話していた『“It”（それ）と呼ばれた子』という本（Pelzer 2001=2010）を読んでいる¹。この本は、幼少期に母親から虐待を受けた著者が、その体験を綴った自伝である。なるほど読み進めるのが辛くなるような壮絶な記録である。著者によると、彼の母親が彼を「それ（it）」と呼んだ²ことは、彼が受けた仕打ちのなかでも最悪のものだったという。

今までだって、同じようなことは何度もくり返し言われてきたけれど、今回の“It”という言葉ほど残酷な言葉はなかった。

ぼくは“It”なのだ。人間以下なのだ（Pelzer 2001:140=2010:232）。

彼の母親による虐待は、彼を人間ではなく物として扱うものであり、この「それ」という呼びかたはそのことを端的に象徴するものだ——そう著者は訴えているように思える。そして、この呼びかたがこの本のタイトルとして選ばれていることは、多くの人たちがこの仕打ちの悲惨さに同意できると、著者側が想定していることを意味する。この想定の後には、子どもを「それ」と呼んで物扱いすることに、母親の愛情の欠如を見出す発想が控えている。

ところで、この本の母親と同じように子どもを呼んだ母親は、近代家族論の代表的な著作のひとつ、『近代家族の形成』（Shorter 1975=1987）にも登場する。Edward Shorter（1975=1987）が引用するのは、18世紀のフランス南部・ラングドック地方の記録（Castan 1971）である。

自分の子どもを性別も区別せずに「それ」（あるいは、しばしば「その生き物」）と呼んだり、子どもの年齢を忘れて（フランスの母親のなかには、自分の息子を「生後6ヵ月か8ヵ月」とか、「11歳か14歳」と思っている者もいる）、死んだ赤ん坊の名前を新しく生まれた赤ん坊につけたり、自分が子どもを何人生んだかを憶えていなかったりする母親のことを、私たちはほど

んなふうに思うだろうか (Shorter 1975: 172=1987: 180)³。

「私たちはどんなふうに思うだろうか」とあるように、Shorter (1975=1987) の狙いは、これらのエピソードを（現代社会に生きる）読者の感覚から評価するように仕向け、当時の母親の子どもに対する愛情の欠如を浮き彫りにすることにある。それは同時に、母親は子どもに愛情を注ぐものだという読者の抱いているイメージを逆照射するものでもある。子どもを「それ」と呼ぶことは、その愛情の欠如の例として用いられている。

一方は現代アメリカ、他方は3世紀前のフランスと時代も社会も異なるが、近代家族において母親が子どもに抱いている（べき）愛情が欠如している証拠として、母親が子どもを「それ」と呼ぶことを用いている点は同じである。

2 母親が子どもを「これ」と呼ぶ2つの会話データ

「それ」ではないが、母親が同じ場所にいる子ども（言語能力が十分ではない乳幼児）を「これ」と呼ぶ（指示する）やりとりなら、私が子育てひろばで集めてきたデータ⁴にも存在する。その2つのデータを次に提示する（トランスクリプト記号の表記法については本稿末尾を参照）。

データ1

（雪村・間宮・岸部・稲森という4人の母親がカーペットの上に座って話している。雪村の娘のナホは母親たちの中心で俯せになっている。間宮の息子のカイは間宮と至近距離で向かい合って座っている。稲森の娘のランは稲森の周囲を動き回っている。岸部の娘のノゾミは岸部に抱かれている。このデータはビデオテープの冒頭に近いため、この前のやりとりを長く遡って知ることはできない。直前のやりとりでは、自転車を漕いでいると、自分は次第に身体が温まってくるが、乗っているだけの子どもは逆に冷えてしまうという話をしている。このデータは12月に収録された。なお、以下のやりとりに出てくる渡倉大橋は全長540メートルである）

- 01 間宮 : 渡会大橋 [越えただけで真っ青なって
 ((カイを指差す))
- 02 >寝てたく [からな::
- 03 稲森 : [ahaha [°haha::°haha [ha::
- 04 雪村 : [°haha°
- 05 間宮 : [↑死んでんちゃうかって
- 06 いうぐらい真っ青 [で>こうやって寝てたく
 ((首を少し傾げ、目を閉じる))
- 07 稲森 : aha [ha [ha
- 08 岸部 : [hahahahaha [hahahahahahahahaha (……………)
 ((聞き取れない部分でも笑い声を出している可能性がある))
- 09 間宮 : [ahan (hahahahahahahahahah) ha::ha::=
 ((顔を岸部に向けている))
- 10 雪村 : [寒いのは寒い
 ((顔をナホに向けている))
- 11 間宮 : = huh huh [huh
- 12 岸部 : [hh それでも寝てた
- 13 (間宮) : [寝てた hahah
 ((大きく肯く))
- 14 稲森 : [hahah
- 15 (2.3) ((どの母親も自分の子どもに顔を向けている))
- 16 岸部 : ウニ::?
 ((顔を胸に抱いたノゾミに向けている))
- 17 (3.9)
- 18 間宮 : あの渡会大橋を::原チャリやったら [一気に越えれんね::ん
 ((右人差し指を左下から
 右上に向かって動かす))

- 19 [(0.2)
 [((右人差し指をカイに向ける))
- 20 問宮 : これ::積んどっ [ても::
- 21 岸部 : [は:::~::~:[:::~:]]
 ((「は」の音が途中から「ほ」の音に少し近づく))
 ((顔を問宮に向けた状態で頭を少し後ろに反らせる))
- 22 問宮 : [荷物積んどっても]
 [((右親指で右肩越しに背後を指す))
- 23 (0.9)
 ((岸部が少し笑顔になる))
- 24 岸部 : チャリで?
- 25 問宮 : チャリで. =
- 26 岸部 : =素敵
- 27 問宮 : 素敵やろ::
- 28 (0.2)
- 29 岸部 : 素敵やな:: [:
- 30 問宮 : [威力はあるで:
- 31 (0.7)
- 32 岸部 : ええな:: [::
- 33 (問宮) : [(う::ん／ほんま)
 ((肯く))
- 34 (0.6)
- 35 問宮 : ええぞ::
 ((顔をノゾミに向けている))

- 16 水野 : .hhhh やった.:>って思ってたんけ [ど<↑どうもフリフリが
岡井 : [(2回小さく肯く))
- 17 水野 : 似h合hえhへhんhのhよh¥うちの子 [か¥ hahaha
18 岡井 : [ほん°とに°
[(笑顔))
(言った後で2回大きく肯く))
- 19 (1.2)
ハルナ : ((カメラの正面に来てレンズを見つめる))
- 20 水野 : .hhh それでもフリフリ着したいから¥ずっと着しててん¥
21 [けhどh:h:h
22 岡井 : [(>ずっと<) ¥着てたんですか¥?
23 (0.3)
水野 : ((肯く))
- 24 水野 : .hhh [hhh
→25 岡井 : [>それはきつと<髪の毛のせい>ですよ<
→26 [これ [も.:髪の毛が [あれやから
[(ハルナを指差す))
[(ハルナを指した指を口元に近づける))
- 水野 : [(顔をハルナに向ける))
→27 岡井 : [フリフリは似合わないん>ですよ<もう.
[(左手を素早く左右に振る))
- 28 (0.3)
29 水野 : [(声を出さずに口だけを少し動かす))
(顔を岡井に向けている))
- 30 岡井 : [ピンクも似合わないか [ら.:,
31 水野 : [°そう°>でも<ピンクのフリフリを
[(肯く))
- 32 [もう-

- 33 岡井 : [ほんっと似合わないよ h [ね h?
- 34 水野 : [も h う h ↑ほんまに
- 35 [かわいいそうな [ぐらい::
- 36 岡井 : [髪の手って s- [↑ ¥そうそうそう ¥
 ハルナ : ((岡井に歩いて近づいていく))
- 37 水野 : .hhhh
- 38 岡井 : [重要やなこれ
 [((ハルナを抱き上げようとしている))
- 39 水野 : [も::今写真見たら::少ない写真のなかのある::(0.2)¥フリ ¥
 40 ¥フリを見るために ¥

これらの「これ」は、Dave Pelzer (2001 = 2010) や Shorter (1975 = 1987) の「それ」と同じように、母親が子どもに対して愛情を抱いていないことを指し示しているだろうか。言い換えると、これらの母親たちは子どもに対する愛情がないから、「これ」という指示表現を用いているのだろうか。

少なくとも私の直感はこの問いに対してノーと答えている。だが、この指示表現が普通の指示表現ではないこともまた確かなように思える。では、この指示表現によって何がなされているのだろうか。この小論は、会話分析の手法を用いてこれらのやりとりを検討し、この謎を解明することを目指している。

3 会話分析——研究手法と先行研究

会話分析は、やりとりをそこに参加している当の本人（参与者）たちが常に直面している問い、つまり「なぜ今それを（why that now）」(Schegloff and Sacks 1973 : 299 = 1989 : 191) という問いに定位して検討する。本稿に寄せて言い直すなら、「なぜ今子どもを『これ』と呼ぶのか」という問いである。

人物指示にかんする会話分析的研究の嚆矢は Harvey Sacks and Emanuel A. Schegloff (1979) である。Sacks and Schegloff (1979) は、受け手が指示された人物を知っているかどうか（にかんする自分の想定）に合わせ、話し手が 2

種類の指示表現を使い分けていることを指摘した。また Schegloff (1996) は、話し手が指示表現をその会話上の位置にも合わせて選んでいることを明らかにした。

近年では、これらの基礎的研究を背景として、指示表現が果たしている指示とは別の相互行為的な役割に照準を合わせた研究も増えてきた (Oh 2007a, 2007b, 2010 ; Stivers 2007)。たとえば Tanya Stivers (2007) は、その場にはいない人物を (話し手と受け手がともにその人物の名前を知っているのに) 「あなたの妹 (姉)」とか「マイ・ハニー」と指示する場合があることに注目する。これらの指示表現は普通の指示表現ではない。受け手に指示した人物の名前を認識させるだけなら、名前というもっと簡単な手段が存在するからである。したがって、これらの指示表現が用いられている理由は、指示以外の何かに求められる。

それは、これらの指示表現が埋め込まれている発言のしている行為に対する寄与である。「あなたの妹 (姉)」は受け手に、「マイ・ハニー」は話し手に指示された人物を関連づけている。このことによって、前者は指示された人物 (話し手のおば) に不満を言うという行為を強化し (Stivers 2007 : 78-80)⁵、後者は指示された人物 (話し手の恋人) の誕生日を告げるに当たって、それを祝う気持ちを付け足すことができる (Stivers 2007 : 83-4)。

本稿で取り上げる「これ」も、これらの Stivers (2007) が扱った指示表現と同じ意味において普通の指示表現ではない。そこで本稿では、上の2つのデータの「これ」を、それらが埋め込まれた発言のしている行為との関連で検討したいと思う。

4 「これ」による指示された人物の特徴づけ——予備的分析

子どもに対する母親の「これ」という指示は、その子どもを物として特徴づける——「それ」について Pelzer (2001=2010) や Shorter (1975=1987) が述べたことから、こう予想を立てることは容易だ。だがこの特徴づけだけでは、母親がこの指示表現を使うことで何をしようとしているかまでは見えてこ

ない。前節で紹介した会話分析の知見を踏まえるなら、この特徴づけをその指示表現をふくむ発言が遂行している行為との連関で捉えることが必要である。次節では、ここに焦点を絞って上の2つのデータを分析するつもりだ。それに先立って本節では、この指示表現が子どもを物として特徴づけるものとなっているかどうかを確かめておこう。

データ1では、20行目で間宮が息子のカイ（9ヵ月）を指差しながら、彼を「これ」と指示している。そう指示した後で間宮は、ミニバイク（「原チャリ」）にカイを乗せることを「積んどっても::」と言い表している。人間を乗り物に乗せる場合に用いる表現は通常、「乗せる」である。これに対して「積む」は通常、人ではなく物を載せる場合に用いる表現である。このことから、載せられる対象のカイを指示する「これ」は、彼を物として特徴づけているということがわかる。

間宮は続けて、今度は自分の背後を指差しながら「荷物積んどっても」（22行目）と言っている。ここでは、「積む」という言い表しかたと「どっても」という語尾の形式が、「これ::積んどっても::」と揃えられている。これらが揃っていることは、間宮がカイを荷物の同類と扱っていることを伝える。このことも、間宮が「これ」によってカイを物と特徴づけているという議論と整合的である。

5 「これ」が果たしている相互行為的な役割——本分析

5.1. 重量をもった物体として子どもを提示する

前節で検討したように、データ1では20行目で間宮が息子のカイを「これ」と指示している。この指示表現をふくむ「これ::積んどっても::」（20行目）は、その語尾の形式からもわかるように、18行目の「あの渡会大橋を::原チャリやったら一気に越えれんね::ん」に対する付け足しである。そこで、まずはこの18行目の発言が遂行している行為を検討する必要がある。

18行目で間宮はミニバイクの馬力の強さを伝えようとしている。この発言の次のような要素が、この発言を馬力の強さを伝えることに力点を置いたものと

している。第1に、間宮は渡会大橋（全長540メートル）に「あの」を付けて強調している。第2に、間宮は「やったら」によってミニバイクの使用を他の選択肢との比較として言い表している。第3に、間宮はミニバイクでこの橋を渡る様子を「一気に」と形容し、そのスピードを強調している。

「これ::積んどっても::」は、この18行目に対する（条件の）付け足しだから、ミニバイクの馬力をさらに強調するものである。受け手の様子を見ても、間宮がこの部分を言い終えそうなタイミングで、岸部は「は:::~::~:」(21行目)と感心したような反応をしている。この反応は、20行目で間宮が言ったことを、ミニバイクの馬力の強さを伝えるものと岸部が理解したことを意味している⁶。

「これ」は、この付け足しがミニバイクの馬力を強調する力を高める役割を果たす。「これ」はカイを物として特徴づける。このことは、カイの人間としての側面ではなく、一定の重みをもった物体としての側面に受け手の注意を向けさせる。そして、重い物を載せた状態でなおスピードが出ると伝えることは、ミニバイクの馬力の強さをアピールすることになる。

5.2. 子どもの姿形に受け手の注意を向けさせる

データ2では、母親の岡井が25~27行目の発言で、娘のハルナを指差しながら「これ」(26行目)と指示している。この「これ」が果たしている相互行為上の役割はデータ1の「これ」とは違う。25~27行目の発言で岡井がしている行為を理解するためには、少し前からやりとりを検討する必要がある。

スタッフの水野は17行目で、そこまで続けていた自分の物語りを終えている。その物語りは次のような内容である。水野が第2子の娘（サツキ）を生んだ際に、彼女の友達などは水野が女の子をほしがっていたことを知っていたので（04・06・07行目）、フリフリを贈ってくれた（12・13行目）。水野は喜んだが（16行目）、サツキにフリフリは似合わなかった（16・17行目）というのである。この「やった:::」（16行目）という喜びと、「↑どうもフリフリが似合 h え h へ h ん h の h よ h う ち の 子 が ハ ハ ハ ハ」(16・17行目)という残念な現実との落差が、この物語りのオチを構成している。水野はこの発言の終了

に近い部分を、笑い交じりか笑い出しそうな調子で発し、また言い終えた直後に笑っている。これらの笑いは、ここにオチがあること、したがってここで物語りが終わることを刻印している。

25～27行目の発言の最初の発言順番構成単位 (turn construction unit)⁷、「>それはきっと<髪の毛のせい>ですよ<」(25行目)は、この物語りのオチを構成しているサツキにフリフリは似合わなかったことについて、その理由を推測するものになっている。まず岡井はこの発言の冒頭を「それは」で開始し、続く部分が既に語られたことにかんするものであることを予告している。そして、「きっと……のせい」という理由を推測するフォーマットを用いて髪の毛に言及している。

また岡井は、この発言順番構成単位を「よ」で締めくくっている。この「よ」は、サツキがその髪の毛のためにフリフリが似合わないことについて、岡井が独自のアクセスをもっていることを刻印する (Hayano 2011)。だがサツキは岡井の娘ではないから、岡井はこの発言順番構成単位の後で、自分が独自のアクセスをもっている理由を明かすことが筋の通ったこととなる⁸。

実際、岡井はこの発言順番構成単位が完了すると、受け手がそこで応答を始めないように直ちに次の発言順番構成単位を開始している。それは、「これも::髪の毛があれやからフリフリは似合わないん>ですよ<もう。」(26・27行目)というものである。ここで岡井は、ハルナを直前に述べた理由で説明できるもうひとつの例として報告している。もうひとつの例として報告されていることは、岡井がハルナを「これ」と指示する際に「も」という助詞を選んでいることからわかる。つまり、この2番目の発言順番構成単位は、ハルナという別の例を示すことで、最初の発言順番構成単位で述べた理由づけの説得力を高めている。

岡井は、ハルナが自分たちの目の前にいることを利用し、ハルナがその髪の毛のためにフリフリが似合わないという理由づけを説得的なものにしている。これは外見的なことがらだから、話として聞くだけよりも実物を見たほうが納得しやすいことは明らかだ。そして実際に岡井は、水野にハルナを見させなが

ら彼女について報告している。すなわち、岡井はこの発言順番構成単位の冒頭で、ハルナを指差しながら「これ」と指示し、水野の注意をハルナに向けさせる（その直後に水野は顔をハルナに向けている）。そして水野がハルナを見ている状態で、「髪の毛があれやからフリフリは似合わないん>ですよ<もう。」（26・27行目）と報告を続けている。

「これ」という指示表現は、報告の本体に先立って水野の注意がハルナの姿形に向くように働きかけ、髪の毛のせいでフリフリが似合わないという理由づけをより効果的なものにする。「これ」は指示された子どもを物として特徴づける。岡井は、「これ」のこの特徴づけを利用し、水野の注意がハルナの（性格や気質などではなく）姿形だけに集中するように仕向けることができる。つまり「これ」は、水野にハルナをどのように見るべきかを伝えることで、ハルナは髪の毛のせいでフリフリが似合わないという岡井の理由づけの説得力を高めることに寄与する。この寄与は同時に、フリフリが似合わない理由を髪の毛に求めるといふこの発言全体が遂行している行為に対する寄与でもある。

6 結論——再び子どもの呼びかたと母親の愛情

4節で例証したように、「これ」という指示表現によって、母親が子どもを物として扱うことは確かにある。だが5節の検討から明らかなように、このことだけをもって、その母親に子どもへの愛情がないと断じることはできない。この指示表現を、それが埋め込まれた発言の遂行している行為との関連で捉えた場合、その果たしている役割は母親の愛情とはまったく無関係なものであった。すなわち、データ1の「これ」はミニバイクの馬力の強さを強調することを助け、データ2の「これ」は髪の毛のせいでフリフリが似合わないという説明の説得力を高めていた。

つまり母親は、個々の発言で遂行したいことをより効果的に行うためという極めて実践的な狙いから、「これ」という指示表現を使っていた⁹。ここに、この指示表現だけを取り出した場合にイメージされる冷酷な母親の姿はない。そして、同じことが1節でふれた「それ」やそれ以外の母親の子どもに対する指

示表現についてもいえる可能性は十分にある。

指示表現をその本来の住処である相互行為において捉えること——この会話分析が要請する視座は、母親と子どもの関係を当人たちの日々の実践に即して、つまり日常生活のリアルな相において捉えることを可能にするのである。

付記 本稿の書式のうち、本学・女性学インスティテュートから指定を受けた事項（各行の字数と各ページの行数）、および本誌において慣例化している（と思しき）一部の事項（本文・見出しのフォントの大きさ・種類、見出しのレイアウト、文献以外の部分における日本語の句読点の使用など）以外は、『社会学評論』のスタイルガイド（日本社会学会編集委員会編 2009）を準用した。

謝辞 私は本稿のデータ2を、須賀あゆみ氏と私が共同で運営している研究会のデータセッション（2014年8月28日）で提示した。有益な示唆を頂いたメンバーのかたがたに感謝する。また本稿を仕上げる段階で、須賀氏・張承姫氏・横森大輔氏・湯川純幸氏から重要なコメントを寄せて頂いた。厚くお礼を申し上げます。言うまでもなく、本稿に残された瑕疵の一切の責任は私に帰属する。

注

- 1 なお、本書の和訳は新訂版が出ており、現在の正式な訳書の名前は『新訂版 “It”（それ）と呼ばれた子 幼年期』となっている。
- 2 原著では “An It!”（イタリック体は原著のまま）となっている（Pelzer 2001:140）。なお、この発言の受け手は「それ」と呼ばれた本人の著者である（Pelzer 2001:139-40=2010:231）。この点で、この「それ」は本稿で扱う2つのデータの指示表現とは性質を異にする。本稿が検討する指示表現も、母親による子どもに対するものである。だが、それをふくむ発言の受け手は、話し手の子どもではなく、他の母親である。
- 3 この翻訳は、訳書からの引用ではなく、（横森大輔氏の協力も得ながら）私が自分で行ったものである。
- 4 私が大阪府下の2ヶ所の子育てひろばで収録したビデオデータである。子育てひろばとは、親（主に母親）が子ども（乳幼児）を連れて訪れ、他の親やスタッフと話

し合ったり、子どもどうしを遊ばせたり、スタッフが企画したイベントに参加したりできる場所、およびその場所を提供する活動を指す(大豆生田 2006; 戸江 2011)。収録は、研究の内容やデータの使用目的などを利用者とスタッフに説明し、許可を得た場合にのみ行っている。なお、データに登場する人の名前と橋の名前は仮名である。

- 5 話し手は、おばから息子の誕生日パーティの準備について電話で尋ねられた後、今度は母親からもそのための買い物をする場所について意見された。話し手は、おばへの不満を母親に言うに当たって「あなたの妹(姉)」という指示表現を用いることで、母親のふるまいをおばのふるまいに結びつけ、不満を強調している (Stivers 2007: 78-80)。
- 6 間宮は、18行目でミニバイクの馬力の強さを伝えた直後に、受け手から何の反応を得ることもできなかった (19行目)。このことが、間宮が20行目を付け足した理由かもしれない (Pomerantz 1984)。
- 7 発言順番構成単位は、話し手が言葉を使って行為を遂行する単位である。文法構造(たとえば疑問形)や音調(たとえば語尾の上昇)は、それを独立した単位として作り上げることに寄与する (Schegloff 2007: 3-4)。
- 8 この点の分析については、張承姫氏のコメントから多くの示唆を得た。
- 9 このことは当然ながら、母親が子どもに対する愛情の欠如を強調するために「これ」を使用する可能性を排除しない。

トランスクリプト記号の表記法

- . : 語尾が下がっている
- , : 語尾が平らである
- ? : 語尾が上がっている
- ↑ : 音声が入印の直後で目立って上昇している
- :: : 語尾が延びている。コロンの数は延びの長さを表す
- : 音声が入切れている
- >文字< : 速度が比較的速い部分
- 文字 : 音声が入比較的大きい部分
- °文字° : 音声が入比較的小さい部分。リングの数は小ささの程度を表す
- 文字 : 音声に入力みがある部分
- [: 上下行の発言・ふるまいの開始が同時
-] : 上下行の発言の終了が同時
- = : 上下行の発言が入切れずにつながっている

- (文字) : 発言が聞き取りにくい部分。スラッシュが入っている場合は、その前後のどちらかの可能性がある
- (……) : 発言が聞き取れない部分。点線の長さはその部分の長さを表す
- (数字) : 0.1秒単位で計測した沈黙の長さ
- .hhh : 吸気音
- a, h, n, u : 笑い声
- h 文字 h : 笑いながらの部分
- ¥ 文字 ¥ : 笑い出しそうな音声の部分
- ((文字)) : 分析者による注記
- : 注目する行

文献

- Castan, N., 1971, "La criminalité familiale dans le ressort du Parlement de Toulouse 1690-1730," A. Abbiateci, F. Billacois, Y. Bongert, N. Castan, Y. Castan, P. Petrovitch, *Crimes et criminalité en France sous l'Ancien Régime: 17^e-18^e siècles*, Paris: Armand Colin, 91-107.
- Hayano, K., 2011, "Claiming Epistemic Primacy: *Yo*-Marked Assessments in Japanese," T. Stivers, L. Mondada, and J. Steensig eds., *The Morality of Knowledge in Conversation*, Cambridge: Cambridge University Press, 58-81.
- 日本社会学会編集委員会編, 2009, 『社会学評論スタイルガイド』.
- Oh, S.-Y., 2007a, "Overt Reference to Speaker and Recipient in Korean," *Discourse Studies*, 9(4): 462-92.
- , 2007b, "The Interactional Meanings of Quasi-Pronouns in Korean Conversation," N. J. Enfield and T. Stivers eds., *Person Reference in Interaction: Linguistics, Cultural and Social Perspectives*, Cambridge: Cambridge University Press, 203-25.
- , 2010, "Invoking Categories through Co-Present Person Reference: The Case of Korean Conversation," *Journal of Pragmatics*, 42(5): 1219-42.
- 大豆生田啓友, 2006, 『支え合い、育ち合いの子育て支援——保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論』 関東学院大学出版会.
- Pelzer, D., 2001, *A Child Called 'It'*, London: Orion. (=2010, 田栗美奈子訳『新訂版 "It" (それ) と呼ばれた子 幼年期』 ヴィレッジブックス.)
- Pomerantz, A., 1984, "Pursuing a Response," J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, 152-63.

- Sacks, H. and E. A. Schegloff, 1979, "Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation and their Interaction," G. Psathas ed., *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, New York: Irvington, 15-21.
- Schegloff, E. A., 1996, "Some Practice for Referring to Persons in Talk-in-Interaction: A Partial Sketch of a Systematics," B. Fox ed., *Studies in Anaphora*, Amsterdam: John Benjamins, 437-85.
- , 2007, *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*, vol. 1, Cambridge: Cambridge University Press.
- and H. Sacks, 1973, "Opening up Closings," *Semiotica*, 8: 289-327. (=1989, 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるのか」G・サーサス／H・ガーフィンケル／H・サックス／E・A・シェグロフ『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社, 175-241.)
- Shorter, E., 1975, *The Making of the Modern Family*, New York: Basic. (=1987, 田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳『近代家族の形成』昭和堂.)
- Stivers, T., 2007, "Alternative Recognitional in Person Reference," N. J. Enfield and T. Stivers eds., *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural, and Social Perspectives*, Cambridge: Cambridge University Press, 73-96.
- 戸江哲理, 2011, 「子育て支援サークルの会話分析」京都大学大学院文学研究科2011年度博士論文.